

# 加藤景範著 『暇日筆記』翻刻

大阪府立中央図書館 読書支援課 佐藤敏江

はじめに

底本は大阪府立中之島図書館蔵（甲和二三一一）加藤景範筆 一冊（二四、六×一七、一c m）  
表紙表裏各一、本文二二、白紙二丁

江戸時代後期の大阪で旧派歌人の流れを引き、代々歌道を教授した二家の内の一つが加藤家であるが、加藤家がその地位をしめるに至ったのは加藤景範の代である。

加藤景範は、江戸時代の歌人・和学者。近世の大坂でいうところの町人学者である。

父親の影響で幼時から和歌に親しみ、烏丸光荣門下の松井政豊に師事、また懐徳堂に学び、後学主の三宅春楼・中井竹山に協力して懐徳堂の最盛期を築いた。

また和歌・和学で名声を高め、歌道を門人に教授した他、著作に励んだ。著作物は、雑学的な傾向が強く、多数に及ぶ。（加藤景範については、多治比郁夫氏による当館紀要第八号、『京阪文藝史料第二巻』『加藤景範年譜』に詳しい）

『暇日筆記』は平成一九年度に収集した加藤景範の自筆資料であるが、かつて、大阪における古書店の老舗であった鹿田松雲堂の『古典聚目』八四号（大正五年一〇月）の写本国書の項に、『暇日筆記』浪花 加藤景範自筆 随筆稿仮冊 一冊」としてとりあげられた経緯がある。

景範が耳にした雑多な巷間の噂話を書き留めたもので、作品としての完成度は低い、各所に書き直しがみられ、推敲の跡が窺える作品となっている。

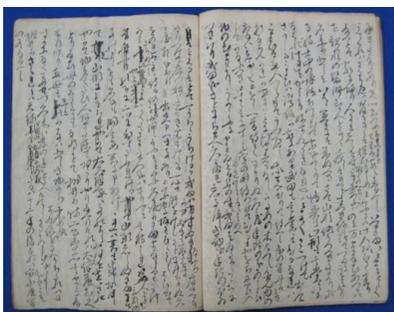
尚、中之島図書館では、この作品以外にも、景範『森銚三著作集九卷』『金蘭斎』の冒頭で「たいへんよいもの」と紹介された手稿本『間思随筆』を所蔵していることを付け加えておく。（本館紀要一二号に多治比郁夫氏により翻刻された後、『日本随筆大成五卷』にも翻刻）



表紙



8丁裏～9丁表



14丁裏～15丁表

中之島図書館所蔵加藤景範著作物

「間思随筆」(手稿)

「教訓十五條」(烏丸光榮著 加藤景範注・筆)

「竹葉露」(手稿)加藤景範／中井竹山／履軒各自筆

「竹葉露」(手稿)

「何世話」(写)

「國雅管窺」

「藏山集」

懷徳堂・関西大学・大阪市立大学等他機関で所蔵している資料の複製(19点)

凡例

収載にあたっては底本の形を尊重し、修正の部分など原文のままとした。

加筆された文章は青字で表示した。

異体字は通行の字体に改めた。

句読点などは適宜これを施した。

解読できない文字は□で表示した。

確定できない文字については(カ)を付して表示した。

訂正の部分は取り消し線を引き、右側に小字で表示した。

暇日筆記

宝暦乙亥春

□□□□□□ 五□□ □□ 珍

加藤景範疇手稿本

暇日筆記

○鍋釜などのいかけしてよをわたるおのゝ、松嶋のほとりにて

磯近きあまの苦やの烟にて名にこそたてれ塩かまのうら

○ある土瞽者をあて、さらしなの月見にまかりけり。月出る程いたくめて、哥はいてすやと瞽

者にいひければ

わか心なくさめかねつ更科や姨棄山に澄月をみて

とすしけり。それは古哥也といひければ、その月をみてのへもし、留りてわかにはんといひけり。

○伊豫の大洲しろしめす遠江の守加藤のきみ、鎗の術にてならふ人もなかりしか、みづから猶心

ゆかぬ事ありと思し召ける。其頃蟠溪和尚に逢給て、ふと鎗の事語り出給ふに、和尚笑てさこそ思すらん。つく／＼君のやうをみ侍るに猶予の究ぬ所あり。いさ心み給へとて、かたみに扇をわか前に置いて、聲をかはしてひとしくあふきみ給へとて、やといふ聲と／＼もに取あくるに、君は取て開き給ふに、和尚はすてに十度あふかれたり。又鎗にてつきてみ給へとて立あひ給ふに、わさのかきり尽し給ふを、扇にてあひしらひて一度も身にうけす。われ此わさ露弁へ侍らねと、受はらふ程いといとま多しといへるとぞ。

○上野下野改かみつけしもつけとよむは、草を毛といふより。野は草の生るなれば、野の多きか草のよく生るかの心にて、けの国と言なるへし。

○大石良雄の山科におはす程、内人は安藝の国にあつけ置れけり。ねたみ心ある人也ける。ある時良雄の方より白き帛をやりて、衣に縫てよといひおくられしに、其比良雄の妾にかるといふ女有。内人これや少しねたかりけん、そなたにてかるにこそぬはせ給ふへけれとて返し遣はせり。其後いくほどなく復仇事遂給り。かの衣は其際のれうとしられぬ。内人こよなう悲しみて、露さる心つきたらましかは、さるむらいのわさはすましき物を、死すとも此うらみはるへきかはとなげき思しけるとなん。其きわめ衣を内人の手にぬはせんと思しけるは、いとふかき心有けめと心弗しれる人のほめけるとぞ。

○わかき男労症のやうにて薬治すれとしるしなかりしかは、くすしの手をはなれて、日ごとにすることなくあそひありきしに、坊間にて大なる布袋の木像をみ出たり。妙工の作にや有けん。ゑめる顔のいひしらすおかしく覚えて買取てもて帰りける。あからめもせず打向ひをるに、何となく心地よけに打多まれいひ少しもなやましけなる時俣、かの顔をみれば、とみにさはやく心ちしけり。かくする程にいつとなくすくよかに成にけるとなん。

○道行人の中に、ふとたれにかよくおほえたとと思ふ人あり。其人はたれにかと思出るに、親しく物言しにもあらで打みしりたる計の人也。まことや、其人此比みさりけりと思ふも、思ば久しく成にたり。○年の程を思ふに、今はおさ／＼なく成にけんよと思はずるに物あはれ也。

○近き世より、伊豆の海に鯛か淵と名付る所あり。海の底にいと大きな岩あなにて、其中にあるあはひはこと方のにまさりて、其あたりにはめてたき物の数にすめり。いと多かれと、とりうる事まれ也。いかにとなれば、其穴の中はいとひろ／＼としたる本に、えもいはす大きな鯛一ツあり。其鯛のおくの方に向ひたるひまをうか／＼ひて、そと入てとる也。もしはかりたかへぬれば、其鯛にのまる／＼と也。かの鯛小き程其中へ入てあるま／＼に大きに成て年へたるか、今は其穴を出得ぬ成へしと其浦のあまのかたりけるとなん。

○二条京極のあたりに、大石良雄の妾ありけり。良雄あす東へも平本んとするよひの日、か

の妾のかり行れけるに、打みるより、あな心得す。君のおもゝち常ならず。何事のおはすにやととふ。良雄さらぬさまにて、此比いさゝか心地あしかりつる。けにやとまきはして酒打のみ、琴ひきよせ少しかき合するに、妾ま驚おどてさりやたゝならぬ御けしきとみしか、今のしらへのかはりける事よ。君かり初の事にさしも遊るき給ひなんや。こは大事の出来にけるにこそ、さ計の事、今まで露もらし給はぬは、御つゝしみの深きなめりな。けに御ことほりと思給へなから、かつうらみなましもえあらず。何事にまれ、ほのかすめ給へとかこちければ、良雄今はつゝむもいとひんなき心ちして、あるやうまきこえたり。妾いと嬉しと涙落して、やま外まに出たり。其さまなとやらん。心得ぬさま成ければ、よひけれといらへもせず。あやしと出て求るに、大きな松の枝にかゝりてくひれ死しけり。こはなそやといたきおろし、心の限り尽されとしるしなし。やかてかれか父をめして、たゝ何の故とも知らぬますうらみかほにみえしか、さる事あらんとまはかけてもしらす。今はせんすへなし。日比うらなくものしつる物を、何のまもまふしをもあかさてかくはしつるならんまはれは、翁かしらふりて、かれ日比君を神たうとみてありし物を、たとひふと恨る筋ありとて。かゝるわさすへきにあらす。こはなへてならむ事もこそ出来つるなめれ。むすめは君に奉りたれば死すともいかにかせん。唯其事をつゝみ給ふか、心にかゝり侍ると言。良雄も胸ふたかりて、猶かくしたらんは中とあしかりなんと、残りなくかたり聞えたり。翁さそとよるこひて、かれおのこならましかはいつこ迄も後れ侍らんや、女のすへきやうなく、はたをのれか口よりもれなん事もこそと君かおほさんも心くるしさに、御心落為させんとて、さはしつるなめれ。さる上はをのれも年比御恵うける身なれば、娘のかはりに御供まの數にゆるし給は、此世の思出ならんとせちにねかひければ、良雄さしも心のそこみつる上は俱して下らまほしけれと、しかゝ事定ぬる上に、又まを加へたらんは、人々の思はん所もいかにそや、覚束なければ、唯かれかま後のわさ、ねもころにいとまむへし。そもわかすへき事なるを、汝まかはりてよくつとめよとさとされければ、翁とかく思われてなくゝ帰りけるとぞ。

○野會盡(カ)といふは陽煖(カ)の義にはあらて、やまとの訓を雅字をさるへきぎ文字にあてたるなるへし。

○大坂舟越浮談不可記丁に八百やあり。一人の子あり。名を音といふ。いとわる者にて親を苦しめ、人をあさむき、さまゝよからぬ事のみつもりければ、後は公の戒を受、終には父母まで罪を得てからきめやみんとおそれつきてければ、なくゝ公に出て親子の義を絶ておひはなちぬ。其際に、母陰にいましめて、汝心とかゝるうきめをみる。露悔る心あらは吾一言をきけ、今よりいかにほふれまよふとも盗をはかまつてすへからす。大坂にあらん限りはひそかにあり所を吾に告よ。思ふ心ありといふ。其後あり所きとて折々ま錢を袖にして行てあたへけるか、いくほとなく其所をも



し時、僧正こしにのりなから行れしを怒りて、先をととめ、こしより引おろさせられし事ありと  
なん。又いつの比にか松平出羽の君かりたち出させ給ひし時、大社の北嶋インゲ両家アライツ  
レナリケンこして遥の向ふを通られしか、君のあとよりいたり給ふむしらすや有けん。のりなから  
さらぬさまにて行れしを、君怒り給ひてかれは木と覺ゆ。などわかさきのりはするぞ。か  
れ引おろせとのり給へは、従者廿人計やつてかけ出たり。其時近うまいりける何かしとかいふわ  
か人君の前につと出て、下部のやつこはやりてあやまちもをあらん。をのれに仰付うけ給はり候  
はやとこふ。さはそくゆけとの給ふ。やかてはりり出し先に者ともめしありとて皆返し、唯一  
人追かけしのすさの中つとかけぬけ、やとといひてこしに手をかけしか、いかしけんあを  
のけにそりたふれぬ。こは何者ぞ、いかなるゆへにやと、すさとも驚きさはけと、ものをいはず。  
こは故こそあらめ、たとくゆけやとてはるかに行過にけり。やと有て君いたり給ふに先おぶ者驚  
て、こはなぞ、何かしよ、それかしよと呼けるに、小の者心を目を開きたり。君いかにそいかに  
と問給ふ。やうく起あかりて、あやしき事に待る中哉。おのれさう国ののりものに手をかけ引  
おろさんとせし程中も目くれ心地まとひしか、さる後は物も覚え侍らすとかしこまりいふ。君  
あきれ給へる気色にて、さうこは神のたすけもそ付くににをかすへからすとの給ひて怒  
もこんととけにけり。長なる人かれか心もちひをはかりしり、ひそかに感し其事となく君にす  
めねかへ給へりとなん。

○藤堂の御家にか者に次郎衛門事いふ人有。忍むさする者を  
伊賀衆中賀衆下言とり者の上手也けり。同じ御家に重き  
罪人有けるか、事あらわれんとせし時、いつちへか逃かくれけん。のこる方なくもとめさせられけ  
れとしれす。後にそのやかたにかくれをると告る者あり。やかて使を遣はし、かの者さる罪あ  
り。さて置かたければ、罪な中んとす。引出し給はりけんと書送り給ひければ、さしも聞定め給  
へる上は隠すへきにあらず。されと罪あればこそ吾陰にを頼み来り候なれば、無下にわたし参ら  
せんもあまりにいひかひなく、二日(カ)得しも参らせましく候、たと同じくは罪なため給てんこそ  
なたらかに候へとて、うけひくへうもあらず。つめに公に訴ぬれば、公より出しやるへき御命下り  
けり。さる上はそむくへきにあらずとて、日を定めて其所までおくり出すへし。とりてを出れと  
いひ送られけり。さて、かの者にあるやうさとし聞えしいかにもしてきりぬけ逃へし。こな  
たよりも心を添てんといひければ、かの者おこの剣術しれ者なれば、心得候とうけかひぬ。こなた  
にも、こたみのとりものはいと晴のわさ也。心ゆるみしてはかられたらん恥也とて、次郎右衛門  
を初め覚えの者御迎出たり。あすといふこよひ、かの次郎右衛門かひくれにみえず。こはなぞ、か  
れをこそたれもくたのみ思ひつるにといふも有。おくしてのかれたるなとそしるもあり。君も  
大に怒り給へと、更に今せんすへもなし。夜待ぬれば彼所に皆至る。むかふの方よりも彼者を見し

て来る中より聲をかけくも程まあれ。あはや今とらはれやせん、しそんしてにかしやせんと手に汗すへし。むかふより聲をかけ、かの者を引出かみしか、うしろよりとらへつと聲かけて中ふを、繩をかけ事なく引立たる者をみれば、次郎右衛門也。其いつこより出けりとけりともみえず。たゞ鬼神のわざと舌ふるひせぬはなし。やかて引返り君にしか聞え上ければ、かつ驚き、かつよるこひ給て、いかなるかまえそと問給へは、此比忍ひてさきのあなぬをうかひつるに、しかくひひ合せぬ。さるはたゞにとらへかへてもあらねは、むかふの人数の内へかくれて、かくははかりしぬといひけるとぞ。

○紀州社宮の湊の川一年二年計不可至一夜の間に川の底高く上る事あり。其さま堤をつき上たらんやう也。あはひ四懸計か程也。あるは五六日十日計もさてあると也。其間は水は地の下をくろり流るゝ也。よしの河の水の上にもさる所有と也。

○頼守大久保侯の御家に桃井平四郎武田十郎衛門とて鎗の上手あり。桃井はずやり、武田は十文字やり也。武田の門人、武田にすやり十文字の利不利を問けるに、武田言、いつれも其利ある中に、物を引よせ逆るをかけとむる事たぐ十文字の利まされりといふ。桃井か門人此を聞て又師に問。桃井言いつれも利あり。中の唯上手まされり。器によらすと聞ゆ。此事を門人たかひにあらそひけるか、これは両師のしあひあらは明らか事定るへし。いかてさあらなんと家の長なる人と人とねかむすあけり。ある時長事の序に此事を君に聞えけり。君いとよからんとしあわせまおほせけり。さて日を定め双方の門人ある限左右につとふ。兩人立あひ聲合するかとみしか、桃井はるかにまさるとみえて武田三たひつかれたり。君聲をあげ給て勝負分れたり、ひげやとの給ひてければ、さてやみにけり。武田の門こそりていきとほり、あるは師をうとみけり桃と武田も露もいと心惜き事に思ひて、いかて桃井をうたはやと思ひ定めけり。されは中こいきとほる色もみえず。小中桃井術いか計とも知さりしに、今そかれの能をしりぬ。をのれか立ならふきにあらす益友を得たりとて在しよりも親しみていとたてなく萬ねをころにむつひけり。桃井もかれか口惜しとも思はずぬを感じて、かたみにかくなく交らひけり。桃井常折々此里のなかの妓館にかよひけるか、申ある年の五月十日の夜夜に木機へまかると聞まれは、武田ひそかに用意し、唯一人かれか車道に小くれて待てける。さりともしらて夜更て、桃井や酔うつひたるさまにて帰りけるを、武田うかひてより、聲をかけたらんにはしんしももせんと後より飛かりし唯一中に討たふしける。桃井も小に手はなければとぬまたに得はなたとみくと討れけり。武田雨にふそまま井情ぬ。夜明ぬればその所にて桃井あきられたりといひ出て限りなくさはきたり。此時桃井あか子平二郎といふか三才也。家の子に千草久兵衛といふ者物まれし武藝をもおさく習ひ知ける。桃井きられぬと聞て、物も覚えず馳いたるに中の處に走り行けれどとふえさへかくれければ桃井十

本<sup>ま</sup>は<sup>ら</sup>し<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>す<sup>へ</sup>な<sup>し</sup>。せめて仇のゑにしとすへき事をたに得はやと、そこら  
見まはりけるに小柄刀あり。地を洗てみれば、柄の表は赤銅に七字打たるに、膳所の城の形を彫  
たり。刀の銘は、<sup>志津</sup>十<sup>と</sup>の三郎とあり。是をしるしに求めけれど、<sup>ことに見知れる人もなし</sup>し<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず。さる程に士の  
闇打せられたる。さて置かた<sup>き例也</sup>とて。禄召はなたれにけり。久兵衛はことに身をよすへき方  
もなく、桃井の桃田<sup>(マ)</sup>の母其妻其子をいさなひて小田原の町のかたつかたに幽か成宿しめ、無用の  
調度みなうりて金百両計ありける<sup>也</sup>けり。なりはひに野菜をうりて、かの三人を、いとまめ  
くしくはたらきつかへたり。さて、仇の事露忘れず。神にねかひ佛にいのり猶も下者にさへ問け  
るに○野菜をもてありきて近まわ<sup>た</sup>は東にもいは<sup>一</sup>國をこ<sup>え</sup>か<sup>い</sup>を<sup>し</sup>ま<sup>し</sup>町と里とをめぐり  
て、○心を尽しこれは武士ならば復仇也。其仇八甲信ノ間テアラント言ケレハヤカテ甲斐信農の間  
にわたりぬ○聞けれど、たとる計の事たに聞得ず。其後武田か妻、君の近くつかえける。扈從何  
かしとかやに密通の聞えあり。いつとなくもてさはかれて、君も聞給ひ、各ともに、さて置かたし  
とて所を追はなたれにけり。其後久兵衛は甲斐の国へ立こえ、こゝにしてさすらふる程何とか言  
所にて、とある家に入<sup>ておくの</sup>本<sup>ま</sup>に<sup>中</sup>、方を見れば、武田机によりゐたり。みあはせて、共におとろきし  
か、久兵衛いへらく、こはいかて、かゝる所にまかり給ふそと問。武田言しかく<sup>の</sup>事ありて、此比  
こゝに移りたり。汝は何故にかこゝに至りぬると問。さりやおのれ下臆には侍れと、目の前に主を  
討せ、いかてさて過しなや。仇報ひてはあらし物をと志して、かく遠き境までさすらひ侍れと、  
いまた仇の名をたに知得侍らすとかたる。武田大に感したるさまにて、汝<sup>あ</sup>計<sup>な</sup>の義人<sup>也</sup>と<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>し<sup>也</sup>  
ゆき。さ計心を尽したらんといかてほみ遂すやはあらん。天道の助もそ添給はん。心長く求めよ。  
近き渡りにもある程ならば、必われにしらせよ。助けてほみ遂させんと、いとまめたちていふ。  
さて、程へけれと聞出る事もなくて帰りぬ。かくする程に大方宿にをる稀也ければ、かくては三  
人の人々、常に水汲米かしき、辛き目み給へんも心う<sup>く</sup>ま<sup>事</sup>に思ひければ仇に逢ん事もいつの限  
りもしらねは、今は、妻を迎へてわ<sup>か</sup>口<sup>な</sup>なるあどのつかへさせんと思ひて、かくとこひければ、とま  
れかくまれ汝心のま<sup>に</sup>せとゆるせり。近きあたりにさるへき女迎出て妻とせり。妻にいへらく汝  
を迎ふるは、吾に代りて、此三人につかへしめんためなれば、吾をは後にして、唯三人の御もととを  
心とせよといふ。妻もそのことはを守り、いとまめやかにつかへければ、三人の人もいとうれしと  
思ひ、久兵衛もうらなく物しけり。久兵衛つねに外より帰ることに、三人の人々待事あり。顔に  
てさすかにそれと打出ることはなくてみそかにいかにやなと問。あるはおくの方に打よりて、忍  
ひやかに物語し、妻いたればさりけなきさまにまきはす物から、みな涙くめるさま也。妻いと  
いふかしとみて、ひそかに久兵衛にとぶ。をのれかくかたみにうちとけて物し給ふに、唯さる事の  
われにのみつゝましけにし給ふか、い<sup>ま</sup>さ<sup>か</sup>心をき給ふと思ふ<sup>に</sup>、いと悲しくこそ侍れといふ。

久兵衛いふ。汝かく迄心を尽しつかふるに、何の隔つる事あらん。さるはいにしへの悲しき物語す也。聞ても無口むぐちの事也といふ。さても猶ありしさまにのみみえければ、又重ねてせちに問ければ、~~本~~のさしも心つくして物すめるにつまんも中と隔へたあしからんと思ひて、今は心のおくみつればかたるへし。努力にもらすなとて、~~報~~の事いひ出た。妻聞もあへず、その仇、われよくしりぬ。なとく聞え給はぬそといふに、久兵衛木に驚まつと起あかりて、こは誠か、そもたそやたそととふに、さは聞給へ。をのれ十四五計の程武田の家につかへしものに、内人のそはなれすつかうまつりしか、ある夜市郎衛門夕暮暮より常のさまにもあらず。唯一人行先をもしらせす出られしか、亥子の時過ても帰られず。相知る方残りなくたつね求るれとおはさす。いかにそと内人ねもやらて待れしに、丑過る程、~~妻~~の戸たたく。をのれ出て引明たれば、市郎衛門つと入て、~~妻~~、やをらすのこの上になれるをみれば、衣あけに染たり。内人も驚きて、こはいか成事にかと問れしを、音なせそとて、衣をかへて茶をくめとて、やつかれをつきの方へ出し、内人の耳に口をよせて、こよひ桃井を思ふまにころしぬと語られし。いとみそか言なりけれど、物にまきれぬ比なれば、おさく聞とり侍し。かくて茶もて出けるか、又飯をとて、閑かに打くふとせられしか、つと立あかり、やと誤りてけり。こはいかせん小柄刀を落したりとて、~~妻~~をかへられけり。内人其小刀人見知たりやと問れしに、いな此比求めつる程に、知人はなし。さは何条事の侍らんといはれしに、少し色なをりて、やかてねられぬ。内人はかの血衣をみつからすきて、汝ゆめ此事をもらしそ。外に知人なければ、もれたらんには汝か罪そ。命おしくは命とらるなと~~妻~~口かためせられし也、と語る。久兵衛悦ひにたへす。今迄つみつるか猶口惜といひて、おくに入て三人の人々をよひてとくおき出給とくくとおとろしぬるに、何事の出来ぬるそと驚てはひ出らる。しかくもらして、あなたゆみや、さりともしらて、武田に逢て迹よといはぬ計心の限かきうつしぬる愚さよ、今はたいつにもうつるひぬらん。さはれ先行てんと~~下~~雨をかみて夜の明るもまたす甲斐にはおもむきける。もとありし方に行けるに、早人かはりていつちぬにけんもしらす。天にさけひて足すりすれと、せんすへなくて又~~年~~をもちし帰りぬ、二婦人、こは末地三宅にもすてられたる~~な~~。見し時はしらす。しれは中あらずと悲しめり。久いへらく、さなくし給ひそ。月日ふるこそよかめる物を~~そ~~の詞といふこそ、程ふるかよかめるとはうらめしとせめられければ、平二君や人となり給ひぬ。劍術なと~~中~~をしえ聞えぬるを、御心さとおはして、術もや懇し給へれば、今は刃先をならへてこそ仇をうち侍るべきといへり。さてある程に蓄へし物も尽なんとすめれば、かち荷持といふ事をさへしけり。一日小田原にありしに、東よりよき武士の荷物とみえて四ツ花菱の紋降たる霞せる長ひつ七ツ人あまた添て来る。久兵衛より付て其荷物もたせ給へ、目出たき御よそひとこそみれ。わか如き浅ましき者は、



所に至る。鷺坂やかすみより小の外の外よかれ引出せとやかすみゆんとす。山形とめ先事のよし知らせ後まをいはなまはまを引引出せとて、引出せしは、平二郎こは何の御めしに侍るやらん。いきりていふ。鷺坂つとよりて、汝か身にも人に乞るゝ物あるに、刀のこゝろみにいのちわれに得させよといふに、平二驚きて、あるかひもなき身のおしかるべきには侍らねと、身に志す事の侍るなれば、今とては得参らすましく侍る。志の叢果したらん時こそいかにも思のまゝになり侍らんといふ。汝かことき身に何条志志す事とは何事ぞ、いひ出る上はとまれかくまれきらてはあらし。舌なうこかしそとて、すてに刀ぬかんとす。山形をしとめ、かれか風情なればとて志す事のなかるへきにあらず、さる願のあらんを、しめてきらんも無下に心なきわさ也といへるに、何条さる偽にはからるへき、そも誠ならば其しるしみせよとせりかたせむ、心得たりとて、膝の下よりこもつゝみとり出すかとみしか、氷の如くなる物すとぬき出し鷺坂か目の先へさし出し、これそしるし見給ふやといふまままなこおもちおそろしく鷺坂は色もなし。山形大に感じ、あはれものゝぶや、志の筋もおさく立にし、さこそ心を尽すらん事、武士のよきかみ也、いさか志をたすけんとて、とて方金二枚取出し、いさかあたへ今は刀をもおさめよ。われも帰らんといふに鷺坂平二平先刀を納め恵の辱きを拜して、いとありかたき物から、かねてのそなへも少しく侍れば事たらずしも侍らすとて、さくけて帰しける。鷺坂木木のこさらはしはらく預り置ん。用あらん時取にこよ。わか家はその所也といふ。鷺坂いかりて、乞食よ、汝にやりたる物を返せはとてとりいるきかは、たくはへあるといふも偽ならん。たくはへある身にて何条さる浅ましきさまにはあらん。偽ならずは出しみよとのる。平二は何心もなく、唯いきとほりにたへかねて、又金を出してみす。山形胸つとふたがりて、あな浅まし、わかき心地のいたりなさに、さる貪欲のおのこともしらて、さは物するにこそ、是非かならず禍を招くへしと思へり。さるは不やうの長居也。いさ帰り給へとてつれて帰りぬ。山形は帰りても猶心をちす。鷺坂か金に心うつりては必さて見過さし。もしこよひの程に行本事もそあるゆ本事必危うしと思ひて、やをらかの所に行ぬ。山形のはかるにたかはす、鷺坂かの金いかてとらはやの心やます帰りもいらす引返しけり。平二今少し年たけたらはやかてそこにはいぬまじきに、わかきけの思ひ至らて、又もとのこやに入てふしたるを、鷺坂うかうひよりて、やをら刀ぬきはなち、外より刀のかきりつきけるに、平二腹を横さまにつらぬかれ、あつと叫ひしか、やかて心もきえぬるをおさへて、かの金うはひ取て帰りけり。しはしありて山形来り、こやの内に入らんとしてかはとすへりたふれぬ。あやし雨もふらぬに何の水にかとさつるに、なめらか成手さくり、血と覺えたり。本猶あやしめて乞食ありや、ままの山形と打入たるに、いらへもせすふしたるさまたならぬけはひひむ、むねははかれていたきおすに、たた血にまみれて息は絶にけり。口惜しとはさらにもいはす。本後礼本。いたきて池のほとりへ出

葉など口に入れ、きつをさくりくゝりなどする程、久兵衛は帰りたるこやの外より、今帰りさふらふといふに音せず。打入たるに平二はなくて血くさく、そこらになかれたるさまに大に驚き、こはなそと見めぐらすに、水影にすかしてみれば二人組合たる影あり。そも何者そと刀ぬきもち、やかてきりかけんとす。山形やゝ誤なせそとて、二刀~~兼~~ともに指出し聞候へと、よひよりのさまつぶさにかたるに、久兵衛は~~申~~<sup>心くたけ意</sup>れ心もうせて、~~未~~<sup>ひなきにかりのる</sup>止叫~~の~~地~~に~~あし。おとり上りくゝ齒をかみて泣たふれぬ。山形さるはせんすへなし。きりたる驚坂はたやすくうつへし。先うかゝふ仇はこそ久兵衛しかくゝと告、さは心安しうつへきたよりあり。先心しつめ~~れ~~<sup>てわか</sup>れ~~れ~~へ来るへし。いへるさまいとまことしく覚えければ、さる上はおほせにこそ従ひ侍らめといふ。さは此人おひて来り給へとて家に帰り、人にも知らせす~~おく~~<sup>の</sup>一間に入わか妻子にのみ万まかなひあつかはせ、親族の医師むかへ、とかく療しけれと生つきは絶てつゐにうせにけり。久兵衛悲しみいはゝ愚かにそ成ぬへき、さて山形仇うつへきたより求める程、士中の博徒相つとひて家をめぐりて博打す。山形も其當にいさなわれけれど、もとより好まぬわさなれば、とかくかこつけて出会さりしか、こよひは驚坂か家があり、武田も其當にて有るなれば、こよひそ兩人つてにてうつへし。我先至りて待へし。虎の半計そよき折ならん。かれか家にはことに川守者もなし。かための木はつし置ん、内のあないしかくゝ也とをしへ、暮待てまかりぬ。久兵衛年頃のほあこよひこそかなふべきとすゝみにすゝみ、用意のこりなぐとへの寅の時待つけて有り、やをら忍ひ入、物のひまよりうかゝふに、まとゐる上の坐に武田そゐたる。たゝちにつきいり武田をきとにらまへ、久兵衛そ忘るましき物を、年頃のほる~~事~~とくるそとて一うちのうちけるか、武田か刀ぬきも果させず~~刀~~<sup>なから</sup>をぬき~~も~~も肩先よりきりつけて、床の板迄そきりさけたる。一坐肝をけし、さとにけちりぬ。久兵衛聲をあげ、主出給へ、申へき事ありといふ。驚坂わなぐゝはひ出て、をのれそ主に侍る。何~~れ~~<sup>を</sup>聞~~へ~~<sup>か</sup>給ふそといふ。久兵衛かさま、まなしりさけ、かみ~~ゆ~~<sup>たちぬへし</sup>をの~~す~~すよ。やとう~~盗~~<sup>よ</sup>よくもわか主人をはきりつる其報しれ、盗人よと~~言~~<sup>の</sup>聲の~~中~~<sup>唯</sup>十~~刀~~の下に二ツに分てたふれける。や~~小~~<sup>山</sup>形しらぬさまにて、事のよしをも名をも聞定め君に申あけゝれば、君も感しおほして、~~先~~<sup>先</sup>山形によせられければ、大久保候むかへとり給ひ、世のかゝみにもなれよとて、桃井の蹟二百五十石其まゝに給はりけり。両母も~~平~~<sup>平二</sup>の~~事~~は悲しき物から~~十~~<sup>そ</sup>人の~~物~~をさへうちたれば、わすかになくさめ□つ久兵衛は孝の道をさへ尽してよろこひをいたしけるとそ。桃井かきられしは元禄~~中~~<sup>戊寅の</sup>年の~~中~~<sup>五月二日の</sup>果~~した~~<sup>夜</sup>たるは十三年の後なれば宝永庚寅の冬なるへし。

別紙

小田原家 スヤリ 桃井平四郎御届五十石

仇(カ)は懇失アル故追放 甲州へ逃 武田十郎左衛門三百石

平四郎子平二郎 三才 家来千草久兵衛

元禄十一年寅年

本田唐之助之助殿忠村家中 山形九内 鷺坂甚内

小刀赤胴十、口脇(カ)口形 裏金銅銘志津三郎

○家居は膝をあるゝにてたれるを、大廈廣屋を求るは居をあんせんとにはあらて、目を悦はしめんとす也。又下さまの貧富に従ひてや、廣くも狭くも立まじりたる。廣きといふも一町に過す、狭きはまことに膝の外なし。それををのれくわか也と拂ひ清め、わづ本成前裁めく物市木土木の車木をわづまも風情あるへくうへなどしたる。さるへき事にはあれと墻一重を限りて、わかよ人のよと思ひしめたも、あるは寸尺の境を争ひなとし出るまじいかなる心そや鳥獸もあさましとみるへき。

○三日月の細くさやかなるは大方はいとあかす身にしむめるを、初秋の三日の比夕さり近きのをきすのひに行住、西の山きは紅をさしたらんやうにて、夕附日の匂ひひき空にふと三日月見出たる□□□□こよなう覚えし。影はほのかにて少し青みたる力にのあかき空にたたむかたつかたに星晴一ツあるかなかきかに見つけかたきせいひしらぬや物も覚みまを程。や、空の色収り月も星も光そひゆくこそ。今たしはしさてすあらまほしく兼し小さやかなるなり行はいと興なくそ覚えし。

○草庵集の詩句題ををのれもまねひてんと思ひて、冬の部までよみたりしか、一首たによみ本本たりと思ふはなし。されとはしめはいとかたき事に思ひしか、さはなくて思ひめくらすに、より所ある心地すめり。いかか(カ)成故そと思ふに、題は題に定まりたればことなる筋題の文字多き故に中、趣は求め出へくもあらず。趣は趣は定まりたりさる上にはた、題の文字のゆるかぬやうにと心を入れてよむ故に、中、力いれ

安し。これにつきて思ふに、とわ年比の題詠二文字三字の結題を、先其文字をはなたととりもちては心得あしかりけり、唯其文字のゆるかぬやうにするを、題詠のよみかたと心得しはあしかりけり。さ心得てよむ時は、詩句題にひとしくてわやすし。さて哥の本意はそむけたり。さらは朝露を朝霞、夕の霏を夕霏とよむに非文字たらて、さよまん事はいふにたらず。全句朝露の心にてよめらんには朝露とよみたらんに何条事かあらん。中、題を一句によみて全句其題意にたかさはらんは中と高名たるへし。と思ひしも又ひかこと也是は人の皆知事也。中、朝露と題の冬字を一句によみて外に其題意あらはになく共わか思ひこめたる所、初より其題の心にてよみ出したらんには人はいかにいふ共わか心にはゆるしてんと○今は覚ゆる也。

○たとへはたとよみ本はのし夜鹿といふ題をとりたりしにはしのお道かや、とよみ本のし本思はは鹿は大や

う夜なく物なれば鹿といふ一字、題にても夜鹿に成へし。さは夜といふ字はのうこかぬやうにと  
思ひて、~~ま~~は暮のま、この一二の句にて夜の字やゆるかさらんと思ひたりし。今思ふに此  
哥文字をよみたるにて、鹿をよむ本の~~ま~~す。又初花の題にて、哀てふことを一木か中にしも  
あまたにやらぬ枝の初花、又庭初雪を、迹つけてとへかしと思ふ人も又人や侍らん。庭の初雪、  
是は題を一句によみたれと、其句をはなちても句と皆題意をふくむやうにと思ひてよみたりし。  
たゝかうやうによみたりしは、皆文字よみにてねんし出す所にて、すてに哥のさかひをはなれた  
りといふべし。

○京に何かしとか言警者ありけり。はやうより何れの君にかめされてありけるか、さて後も  
折々東にめされけるも。一年の下りに君待うけ給て、いかに道の哥はとの給ひければ、所とに  
てよめるを、書付て上りける。其中に、東路の瀬田の長橋こえわひぬみしかきせのよを渡るとて  
といふ哥をみ給て、ことほり也。今より心まにせをやしなへとて又めさくりけるとぞ。

○本多大貳膳所の家臣といふ人有。扇に松と竹と雪ふりたる方をみつから書て、その哥を小い  
巾、時しらぬ松と竹との色も猶白キを後の雪にみすらんといふ哥をよみて書そえたるを、武者  
小路のかみみ給ひて、いたくめて給ひけるとなん。此人娘を嫁する時

なれも又みをくる親にとく成て子を思ふ道の哀しらなん  
とよみてやりけるとぞ。

○源氏物語にいひさして心をふくめたる詞あり。たとへは何として何とすると言ことを何してな  
んと言。かくしてこそかくせめと言事を、かくしてこそといひとめたるあり。

末摘にみつからのうれはかしこくとも先こそはこれはいとときこえさせにくくなんと。

○宝永五年の春京都火災にて内裏炎上し、公卿殿上人の亭里のこりなく焼失たりしに、清水谷  
の大納言実業卿風早参議公長卿も火にあひて、こかしこにさまよひ給ひけるか、二人道にて行  
逢給ひて実業卿

風早と聞も恐ろし今日の~~火~~や

との給ひければ、公長卿 清水谷とて、やけものこらすとこたへ給ひしとかや。右太宰得衛門か  
獨言に記す。

○月やあらぬの哥、諸説いつれかとき得たりとみゆるもなし。つくく思ふに、月や昔の月にあ  
らぬ、春や昔の春にあらぬと思へは、月も春も昔の春也。然るにありしにもあらず覚ゆるは、我  
身に去年にかはる事あるかと尋ねれば、われももとの身也。われはもとの身なれとも、わか昨年  
を思ひなけく。心は昨年には引かへて悲しき也。月と春は昔のまににて、われも昔のわれか身也。

然れ共、我は月と春との昔のまなるにはかはりて、悲しひの心は昔はあらぬわか心と也。

○南部信濃守殿内大藤佐次尾崎富衛門在着し、使者

○南部信濃守殿交代して帰国のむね奏せらるゝに使としてより、~~本例ありて~~ ~~献物献せ~~  
~~本~~ 佐藤大治、屋崎富衛門の二人に命せらる。二人公へ出けるに例御坊主取次で、老中出合  
給ふ。折節他家の使ありけるにめす成爲にカ、南部の御使は次の間へつめられ申はいふに、使いふ。  
わか家の例此は隣にて茶有つる、取次に堀江荒四郎出遅れけるに、何のたかひめありてか、ふと  
あらそひに成て、二人やゝ言あらくのしりける。堀江大に怒り、殿中をはゝからす過言せし条、  
老中へ申上げる。老中其外ありあふ人々あつまり評せらる。其事はとまれかくまれ、上をはゝか  
らぬ条ゆるしかたし。重き罪に落て罰も重く申付るに評議一決す。西常隠岐守殿初より一言を  
もいはすつらつへつきておはしけるを、堀田相模守殿いふかりて、いかにや隠岐とのか何と面々の  
議する事をよそけにはなし給ふは、別に思しめくらさるゝ議論こそあるらめ、さらは今たゝ聞え  
給へとの給ふ。隠岐侯はいく、初よりの評論委しく承りぬ。上を重んせらるゝ条ことほりいたれり。  
されとわか思ふに、民の害にならぬすちは忘給(カ)て咎むへきにあらず。百論の類はたゝ其理を  
取て非を弁給へん事廣き政と言へし。かの兩人は返申にて過言を準とくめらるへきは初より知事也。  
~~本~~ ~~事~~ ~~の~~ ~~それ~~ ~~を~~ ~~忘~~ ~~れ~~ ~~て~~ ~~し~~ ~~か~~ ~~の~~ ~~り~~ ~~し~~ ~~は~~、主~~本~~ ~~家~~ ~~格~~ ~~を~~ ~~お~~ ~~と~~ ~~さ~~ ~~し~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~へ~~ ~~は~~ ~~也~~。今重くとかめ給はゝ信濃  
守上~~の~~ ~~お~~ ~~そ~~ ~~れ~~ ~~て~~ ~~か~~ ~~の~~ ~~二~~ ~~人~~ ~~を~~ ~~き~~ ~~り~~ ~~つ~~ ~~へ~~ ~~し~~。わかために身を忘れて争ひしものを、にくしとにくしと~~（ママ）~~  
思ひてんや。其上今にても、もしいつこにまれ誠徒(カ)おこらん時、諸侯をすへて追伐をさせられん  
に、さる争ひをもせぬたしめ、その武士いくら君とて事の用に立なんや。さはさらはさる者を重  
く罪給ふは上の用に立へきものをほろほす也。~~本~~ ~~上~~ ~~の~~ ~~御~~ ~~為~~ ~~に~~ ~~も~~ ~~こ~~ ~~た~~ ~~ひ~~ ~~は~~ ~~か~~ ~~る~~ ~~く~~ ~~い~~ ~~ま~~ ~~し~~ ~~め~~ ~~給~~ ~~は~~ ~~ん~~ ~~事~~  
然るへしとの給ひければ、満座感し合給ひて百の議論空しく成て此一言に決しぬ。

○宝治哥合の作者の内蓮性は宇津宮入道也。為家の舅也。

○いつの比越後高田の町の中へ龍の落たる事有。三日か内うこかす其俣有し。四日といふは天陰  
雲むらかり来るとみしか、彼龍うこき出るとみる程、雲気あたりにみちふたがりて、龍のほりさ  
りぬとぞ。

○今清の都は盛景と言匈奴の地也。南京北京は藩守となれり。北京はいにしへの燕国也。南京は  
呉也。

○からさけの、海より川にのほるはと人、のいひしをたふるはかりわらひしか、枳花を枳殻の花  
と詩に造れるもおもへは此たくひとおほゆ。

○らい山か子規の句に、郭公鳥と成て明にけり。

○安見三輪先生へ、慎獨の心を問ければ、春の夜の闇はあやなし梅花の花のうたの心を思ひみるへ

しとこたへ給ひしとぞ。

○秋年々風ありてたなつ物そこなはれける比、靈元上皇の御哥也とて、

吹風もさはりあらずなしなのはへ君かじめ遊ぶ長田さなた哉

○徂徠談乞食の頭善七と言者の先祖は景晴の家来に車丹晴と言者なるか、御草履取と成て東照君をねらひ手引、をのれか家来をは皆江戸へつれ来り、乞食の内へ入置たるを、事頭れたる時 東照君御免有て乞食の頭と成たるよし。茂卿政談に書せり。

○日本國中惣高二千萬石にして、日本の武者の惣数三万餘騎也。右は日本の惣軍兵三十三萬騎と言たるには十分一に成たりと同書に言。

○戸籍と言は、人別帳の事也。され共今の代の人別帳のときには非ず。今代の人別帳は誠の人別帳にあらず。着到帳の類也。人別帳と言は其村所の家別を記て、其家との亭主を始め家内の人数を譜代の者迄不<sub>レ</sub>残記<sub>レ</sub>之、よめ取は之を記し、養子をすればこれを記し、婦に他へ行は除<sub>レ</sub>之、子生れば年月日記<sub>レ</sub>之、死れば何月幾日に死すと記<sub>レ</sub>之、出家なとすれば、其子細を記して除<sub>レ</sub>之。其師の寺の人別帳に載<sub>レ</sub>之、出替奉公人をはのせす。是は其者の出所の人別帳に有故也と同所に言り。

○羈取ハ張付ニカクルト言ハ、年始ニ禁裡へ羈献上ト言事有ヨリ重キ取サハキニナルニミユ。水戸ノ義公ノ時、水戸ニ羈取アツテ御耳ニ立タレハ、重キ法ヲ破リタル者ナレハ、御自身成敗ナサルヘキト也。夫ヨリ折々申上レトモ、ナニカ御隙入ニテ延引ス。後ニヒタモノ伺タレハ、サラニ斬シ御庭ニ引マセハ、御自身刀ヲ取テニ三度切ントシタマフカ刀ヲステ、内ニ入玉フ。其後人伺ハ、トカク御自身切ラルヘキトノ事ニテ延タル内ニ彼者何方ヤラン。逃テ事ヤミタリトナン。

### 隨筆

○あかはぢかくとは赤耻也。左傳に荅垢といへるは耻をしのぶ事也。

○昔の烏帽子を見しに、小たる一重を黒漆にてすり、



(端ヲ五部折てつたる也)  
このやうに折目付たる物也。これが左折にも右折にも風折にも土忽ほしにもなる也。其時との衣装に随て色ノく<sub>も</sub>にせし也。これは延徳手間の物にて、いなかの農家に傳はりしよし、しるしせり。みしかき紐一方に一筋つく。これはいかにするにか、さとりかたし。

○夏日の長きを愛すといへるは、まことに炎熱のくるしきをしらぬなるへし。眉山の翁の詞をたせるは、かの風の勝(カ)をもととせるにて、いとむね~~ホホ~~ある筆のすきみなるかし。

一布栖川都に安村搦校といふ警者あり。靈をよくすといふ事を有栖川の宮聞めして、人してめされければ、吉村こよなう有かたき事とよつこひてやかて参りぬ。

一堀部弥兵衛、安兵衛を養子に定めし時、めあはせんと思へは女子十四也。江戸にての事なれば、互におもてをしらす。後に安兵衛赤穂へ下れる時、もいかなる赤穂衛事にか、又人にゆるさずかのむすめにあはず。程なく事おこりて堀部父子自刃せり。かの娘母につかへて~~わびて~~は。江戸泉岳寺の邊に尼になりてすめり。其ほと浅野家の祀絶しをいたく悲しひて、おほけなくもかすかにも主君の御跡たてたまはらん事を廿五度(カ)まで公にうたへ出たり。廿五度といふに時の奉行給ひけるは、汝しはくねかひの~~木~~出る事なれと、是はいくたひねかふとも、とてもきこしめしあけぬ筋なれば、今より思ひとまるへし。をのこならはとらへとかめ給ふへけれど、女とみゆるし置給へる也。又もねかひ出は~~木~~罪かるからしと仰出され給へる。よりて其ねかひは思ひとまりぬ。さて朝夕わか持佛にむかひて、君の父の夫の後世のためとは露~~せ~~けす。人の力もてかなはぬ事なれば、とは只仏の力をたのむ外なし。只かのまつり給ぬるを~~木~~木~~木~~せ給へとのみねかへるとぞ。さる事たれかれやことなきか聞しめされて、あはれと思~~し~~思~~し~~してめさるゝ方々も多く、きぬなど給はるおりもありけれど、さる物は皆相しれるかたへをくりて、わか身は一生麻も~~ゆ~~ゆの外に身にふれさりしとぞ。ことし九十一才にて二月廿五日に身まかれり。遺言して、泉岳寺義士の墓のかたはらにしるしをたてけるとなん。

一枕草子昔覚えてふようなる物と言条下に、七尺のかづらの赤く成たると有。官女の験に髪長く、すそに引たるはつぎたるかつらなるへし。

一新勅撰秋部日法性寺入道殿の

すそのよりみねの梢に移りきてさかり久しき秋の色哉

とあるは実こそむけり。是は女御の内屏風のうた故秋を女御にたとへ、入内をすそのよりみねに移るとよまれし也。故なき紅葉の哥にこれを證とすへからず。